

青年の社会的逸脱行為傾向と空虚感・認知的歪曲の関連

高橋奈央¹ 大野あき子¹ 境泉洋²

Relationship between social deviancy and emptiness, cognitive
distortion in adolescent

Nao TAKAHASHI¹⁾ Akiko ONO¹⁾ Motohiro SAKAI²⁾

Abstract

Recently, crime and delinquency have been changing during adolescence. It is suggested that an obscurity of reality and fiction in the present advanced information society and a feeling of emptiness from anxiety of uneasiness are causes. Nevertheless, there has never been an empirical study providing evidence towards those claims.

This study indicates the relation of socially delinquent and emptiness among college students. The socially delinquent was suggested to concerns attitudes of disvalue to the socially delinquent and cognitive distorted (Yoshizawa & Yoshida,2004). Thus, this study tested the relationships between emptiness, cognitive distortion, and social delinquency.

Consequently, the suggested model was different in men and women. In men, a direct effect towards apathy and an indirect effect of cognitive distortion to the socially delinquent were found. In addition, a mediating effect of egocentricity of cognitive distortion mediating the association between emptiness from anxiety of uneasiness and the socially delinquent was indicated. In women, a direct effect towards an emptiness from an anxiety of uneasiness to social delinquency and a mediating effect towards a denigrating fallaciousness of cognitive distortion mediating the association between loneliness of emptiness and socially delinquent was indicated.

KeyWords ; social deviancy, emptiness, cognitive distortion

1)徳島大学大学院総合科学教育部 Graduate school of Integrated Arts and Sciences,
The University of Tokushima

2)徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and
Sciences, The University of Tokushima

【問題と目的】

近年、犯罪の低年齢化と凶悪化が問題視されている。しかし、平成 19 年度の犯罪白書によると刑法犯の件数は平成 14 年に最多を記録して以降減少し続けている。それにも関わらず「犯罪が減少している」と感じられない理由は、犯罪歴のない「ごく普通の青年（少年）」による猟奇的な事件が過度にメディアに取り上げられることが一つの原因であると考えられる。

また猟奇的でなくとも、犯罪はごく身近に起こっていると気づかされるような驚くべき報道も多くなされている。平成 20 年に起こった大学生による薬物事件を皮切りに、主婦層への薬物波及や芸能界の薬物汚染が未だ世間を賑わしている。一方、情報技術を利用する「サイバー犯罪」も、インターネットの普及と共に急増している（渡邊，2009）。大学生がこのような犯罪を犯す場合、その多くが「ゲーム感覚で罪の意識もなく」「（薬物を）友人から誘われ断れなかった」といった安易な動機から始めており（小野田，2009）、当初は軽度の社会的逸脱行為であったものが重大な犯罪となってしまったものと考えられる。

このような若者の犯罪が起こる原因のひとつとして、高度情報化社会による「現実と虚構の曖昧さ」が挙げられている。間庭（2005）は、高度情報化社会の若者にとっての問題点を 3 つにまとめている。第一に、最近の映像技術の進歩による高画質化によって若者は虚構性を自身の内部に取り込み、特に実体験の乏しい少年であれば現実と虚構の区別が困難になる。第二に他者との相互作用で育つアイデンティティの形成が難しくなり、抑制のきかない、共感性に乏しい若者が多くなる。第三に、携帯電話やインターネットの利用によるネットワーク依

存である。このような問題点から、若者の規範意識やモラルが著しく低下したり、他者の苦痛に思いが及ばないような犯罪が増えているものと考えられる。

また、湯川（2005）は、自己愛と攻撃の関係を実感への不適応（対人的孤立感）と虚構への没入（テレビゲームやインターネットとの接触量・熱中度）という点から実証的に検証している。この研究では自己愛傾向が高いほど攻撃性が高いことや、対人的孤立感が高いほど攻撃性が高いことが示されており、自己愛と対人的孤立感は共に虚構への没入（ゲームやネットへの熱中）に結びついていたことが示された。

このような現実と虚構の間で、清永（1999）は、1990 年代以降の非行が変化しており、戦後から 1980 年代頃までは生存や反抗が非行の主な背景であったが、1990 年代以降は衝動の時代であると指摘している。また、若者たちは心から自己感覚を喪失し、さらに他者感覚や社会的規範軸も喪失することで心が空洞化している。そのため同じ「非行」であっても、原因がわからないといったものが多い（清永，1999）。

このように、現在の非行や犯罪の背景の一つには「孤独感」や「無気力感」といった漠然とした不安を示す「空虚感」があることが示唆されている。しかし、これらの関連を実証的に示したものは今までない。以上のことから、本研究は大学生を対象とし、犯罪や非行の前段階とされる社会的逸脱行為傾向に空虚感が与える影響を検討することを目的とする。

空虚感については、近年研究が増えつつあり様々な定義がされているが、空虚感そのものを主題にした研究は少ない。そのような中で、横田（2008）は空虚感の定義づけ、青年用空虚感尺度を作成している。横

田（2008）では、空虚感は①根拠のない漠然とした不安（漠然とした不安感）②人生に目的や目標を見出せない（無気力・無目的感）③自己評価が低下し、自己像が不確実になっている（否定的自己感）④他者と連帯感を感じられず、孤独を感じている（孤独感）の4因子からなる概念であることが示された。また、この尺度は非行少年の空虚感を測定することが可能であることが示唆されている。本研究では、青年期の空虚感そのものに焦点を当て、また非行との関連も考慮に入れることから、空虚感を横田（2008）にならい、「根拠のない漠然とした不安、人生に目的や目標を見出せない、他者と連帯感を感じられず、孤独を感じている、自己評価が低下し、自己像が不確実になっている」と定義する。

また、湯川（2002）は、このような空虚感やむなしさ感の直接的な現れとして自己存在感の希薄さを挙げている。湯川（2002）の言う自己存在感とは「自分自身に関する肯定的な存在理由もしくは存在価値についての感覚」であり、普段充実感や満足感を抱いている場合はあえて自己の存在自体について意識することは少ないが、これらが得られないとき、自己存在感の希薄さを考えるとして「自己存在感の希薄さ尺度」を作成している。この尺度は「アイデンティティの確立」と負の相関を持ち、「アレキシミア」「情緒不安定性」「精神的不健康」と正の相関を示している。またこの研究では、自己存在感の希薄さと、敵意や怒りといった一部の攻撃性と正の相関があることが明らかにされている。しかし、この研究では自己存在感の希薄さが攻撃性に与える影響については検討されていない。

一方社会的逸脱行為傾向についてであるが、「逸脱」に関しても代表的な3つの定義

がある（宝月，2004）。第一は行為者が社会的に有害な結果をもたらす行為を行った場合、それを病理的であると見なし、その状態は改善の対象とされる。第二は何らかの規範・規則からはずれたり、それを無視する行為である。第三は誰かが特定の行為を逸脱と見なし、ある人を逸脱者と判断し、そうした認定が社会的に受け入れられる場合である。本研究は日本における規範・規則からはずれているかという傾向を対象とするため、第二の定義を用いる。

社会的逸脱行為傾向に関して、吉澤・吉田（2004）は、大学生を対象に社会的ルールの知識構造が与える影響について検討している。社会的ルールの知識構造とは、人が他者や社会と上手くやっていくために最低限行うべきルールを適切であると認識しているかどうかを指す。この研究では、社会的情報アプローチにおける青年の認知的側面は、幼児期や児童期の子どもよりも複雑で、個人の知識構造と社会的逸脱行為傾向との関連が直接的な関係のみで説明されるとは考えにくいという観点から、媒介変数として認知的歪曲を加え、『頭の中の社会的側面に関する考えが整理されていない、もしくは望ましくない考えを持っていることにより、自分勝手な認知的判断をし、社会的逸脱行為の悪質性を軽視するために、それらの行為を実行する可能性を高める』というモデルを仮定している。そして認知的歪曲が社会的ルールの知識構造と社会的逸脱行為傾向に間接効果を与えていることを明らかにしている。ここで扱われた認知的歪曲とは、事実とそぐわない、もしくは不正確な態度、思考、信念で、ある状況において自分勝手な認知的判断をするという内容で、社会的情報処理アプローチなどの攻撃性や非行に関する理論的、実験的、応

用的研究において用いられている (e.g, Dodge, Bates & Pettit, 1990). 吉澤・吉田 (2004) の研究では, 社会的ルール of 知識構造と社会的逸脱行為の関係をより明確にするために認知的歪曲という媒介変数を用いているが, 社会的逸脱行為にはこのような認知的側面も重要であると考えられる. Pier J. M., Prins & Teun G, van Manen (2005) によると, 人や動物への攻撃, 物の破損といった社会的規範や規則の侵害が長期間持続する行為障害の特徴として, 他者に対する認知が敵意的であったり, 実際の意思が曖昧な社会状況で他者に敵意があると見なす傾向がある.

これらのことから, 本研究では認知的歪曲を単なる媒介変数としてではなく, 社会的逸脱行為に至るまでの重要な認知として扱い, 空虚感が認知的歪曲・社会的逸脱行為に与える影響について検討する. 先に述べた間庭 (2005) や清永 (1999) は, 空虚感が直接犯罪や非行, モラルの低下に影響しているという見解であるので, 本研究では空虚感が社会的逸脱行為に直接効果を与えているモデルと, 空虚感が認知的歪曲に影響を及ぼし社会的逸脱行為に至るという間接効果のモデルを比較検証する. 社会的逸脱行為に関して, 吉澤・吉田 (2004) に倣って社会的逸脱行為に対する悪質性を軽視する態度という認知面にも着目し, これが高いほど社会的逸脱行為を実際に経験したことがあるという想定である.

しかし, 先行研究でも吉澤・吉田 (2004) の研究にもいくつかの問題点が指摘されている. 研究の対象が一般大学生であったため, 社会的ルール of 知識構造・認知的歪曲は現時点での評価であるが, 社会的逸脱行為に対する悪質性の軽視と過去経験は「一般の中高校生にとってどう思うか」「中高生

の頃に経験したことがあるか」と問うており, 時間的先行性の問題がこの研究内で作られたモデル図のパス係数の値の低さの原因ではないかと指摘されている. そこで本研究では, 吉澤・吉田 (2004) で問われた社会的逸脱行為に対する悪質性評価と過去経験について, 「現時点での悪質性の評価」と中高生時代ではなく「過去に行ったことがあるか」を問う. そして, 本研究では Fig1 のように, 空虚感や認知的歪曲は社会的逸脱行為に対する悪質軽視に影響し, 社会的逸脱行為の悪質軽視は過去経験に影響するという分析モデルを検証する.

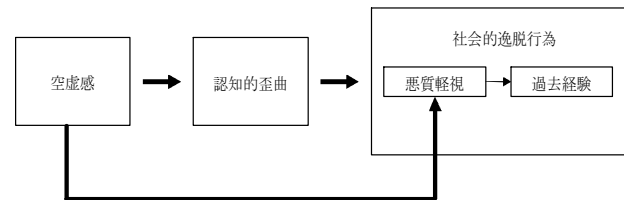


Figure1 本研究の分析モデル

【方法】

1. 調査対象者

A 県内の大学生 311 名のうち, 記入に不備のあったものを除く 285 名 (男子 140 名, 女子 145 名; 平均年齢 19.3 歳, SD=1.05) のデータを分析対象とした.

2. 調査手続き

講義時間中もしくは個別に質問紙を配布・回収した. 調査期間は 2009 年 11 月下旬～12 月上旬で, 質問紙は個人の特がでないよう無記名・任意で行われることなど, 調査に関する説明を行った.

3. 質問紙の構成

①フェイスシート

学部・学科・学年・年齢・性別について回答を求めた.

②青年用空虚感尺度

横田 (2008) が作成したものを用了.

この尺度は「何となく寂しい気分になることがある」(漠然とした不安感)、「何に対しても意欲が湧かない」(無気力・無目的感)、「私は価値のない人間だと思う」(否定的自己感)、「以前と比べて、自分は表情の変化が少なくなったように感じる」(孤独感)の4因子全38項目である。回答は、1(最近の自分に全く当てはまらない)から5(最近の自分にとってもあてはまる)の5段階評定とした。

③認知的歪曲尺度

吉澤・吉田(2004)によって作られた認知的歪曲尺度を用いた。この尺度は「自分に対して、協調的でない人なら、傷つけることもやむをえない(自己中心性)」、「自分がした悪いことを、人のせいにしてはならない(責任の外在化)」、「人にウソをついたとしても、自分が正しいと思えば問題ない(虚偽過小評価)」など3因子全16項目で構成されている。回答は1(全く当てはまらない)から5(非常に当てはまる)の5段階評定とした。分析では吉澤・吉田(2004)に準じ、第二因子の得点を逆転項目にした。

④社会的逸脱行為尺度

吉澤・吉田(2004)の社会的逸脱行為尺度を用い、悪質性評価と過去経験を測定する。この尺度は「自己影響型逸脱行為 SDDB(10項目)」、「他者影響型逸脱行為 ODDB(10項目)」の2因子全20項目で構成されている。SDDBの内容として「親に隠れて酒やビールなどを飲む」「学校から禁止されている遊び場に行く」など、大学生が答える内容には適さないため、「人をおどして、お金や物を取りあげる」「店の品物を万引きする」などで構成されている他者影響型逸脱行為 ODDB 因子(10項目)のみを用いて、悪質性評価と過去経験を測定した。悪質性評価の回答は1(全く悪質ではない)

から5(非常に悪質である)の5段階評定、過去経験は1(全く経験しなかった)から5(非常によく経験した)の5段階評定とした。分析では吉澤・吉田(2004)に準じ、悪質性評価では得点を逆転項目とした。

【結果】

1. 尺度の構成

研究で使用した変数の平均値と標準偏差、また尺度の信頼性を Table1 に示した。

空虚感と社会的逸脱行為に関して、 α 係数は.76~.91となりそれぞれ十分な内的整合性を得られたと言える。認知的歪曲の α 係数が.60~.70と低い値であったが、先行研究(吉澤・吉田, 2004)でも同程度の値であった。

2. 性差による各尺度の比較

男女間で尺度得点に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行い、結果を Table2 に示した。

因子ごとの平均値の男女差は、空虚感では漠然とした不安感($t(283)=4.475, p<.01$)、認知的歪曲では自己中心性($t(283)=2.202, p<.05$)と責任の外在化($t(283)=2.685, p<.05$)において有意に女性の方が高かった。社会的逸脱行為の悪質軽視($t(283)=2.20, p<.05$)と過去経験($t(283)=5.20, p<.01$)では有意に男性の方が高かった。このため、これ以降の分析は男女別に行った。

3. 尺度間の相関

各尺度の関連を検討するため、男女別に相関係数を算出した(Table3)。相関行列の対角成分左下欄は男性、右上欄は女性における各相関係数を示している。

男女間で多少の差は見られるが、自己中心性・虚偽過小評価・社会的逸脱行為に対する悪質軽視と空虚感には有意な正の相関が認められた($r=.20\sim.39$)。責任の外在化

は男性では無気力・無目的感と否定的自己感と正の相関 ($r=.26, .24, p<.01$), 女性では無気力・無目的感のみに正の相関が見られた ($r=.28, p<.01$). また, 社会的逸脱行為の過去経験に関しては, 男性は漠然とした不安感 ($r=.23, p<.01$), 責任の外在化 ($r=.33, p<.01$), 虚偽過小評価 ($r=.17, p<.05$), 社会的逸脱行為に対する悪質軽視 ($r=.35, p<.01$) においてのみ有意な相関が認められ, 女性では認知的歪曲と社会的逸脱行為に対する悪質軽視には正の相関が認められたものの ($r=.27 \sim .52, p<.01$), 空虚感とは漠然とした不安感のみしか有意な相関が認められず, その値も低かった ($r=.17, p<.05$).

空虚感と認知的歪曲, また社会的逸脱行為に対する悪質軽視は一部に正の相関が認められた. 一方, 男女共に空虚感と社会的逸脱行為の過去経験との関連は低かった. このことから, 空虚感は認知と関連はあるが, 実際の経験とは関連が低いことがわか

る. しかし, 社会的逸脱行為に対する悪質軽視と過去経験には正の相関が認められるので, 空虚感と社会的逸脱行為の過去経験も, 間接的に関連している可能性がある.

4. 社会的逸脱行為に対する悪質軽視と社会的逸脱行為の過去経験の関連

社会的逸脱行為に対する悪質軽視と過去経験の相関係数を調べたところ, 男性では $r=.35$, 女性では $r=.52$ であったことが示された. そこで, 男女間で社会的逸脱行為に対する悪質軽視と過去経験の相関係数に差があるかどうかを2つの相関係数の有意差検定により調べると, $Z=-1.75$ ($p<.10$) であり, 有意傾向が示された. このことから, 女性の方が社会的逸脱行為の悪質軽視と過去経験が男性よりも関連が深い傾向であると言える.

また, 社会的逸脱行為に対する悪質軽視を独立変数, 過去経験を従属変数とし, 男女別に単回帰分析を行った. 結果は, 男女共に社会的逸脱行為に対する悪質軽視が過

Table1 本研究で用いた変数の記述統計量

因子	M	SD	α	
空虚感	漠然とした不安感	3.22	.91	.91
	無気力・無目的感	2.95	.78	.89
	否定的自己感	2.62	.84	.90
	孤独感	2.21	.68	.76
認知的歪曲	自己中心性	2.10	.59	.70
	責任の外在化	3.86	.62	.60
	虚偽過小評価	2.67	.71	.62
社会的逸脱行為	悪質軽視	1.47	.44	.85
	過去経験	1.53	.53	.81

Table2 各因子の男女間での平均値の差

	男	女	t値	
空虚感	漠然とした不安感	2.98(0.96)	3.45(0.79)	4.48**
	無気力・無目的感	2.97(0.82)	2.92(0.75)	.43n.s.
	否定的自己感	2.61(0.89)	2.63(0.80)	.25n.s.
	孤独感	2.20(0.67)	2.21(0.69)	.01n.s.
認知的歪曲	自己中心性	2.14(0.61)	2.00(0.57)	2.20*
	責任の外在化	3.76(0.64)	3.95(0.58)	2.69*
	虚偽過小評価	2.67(0.74)	2.67(0.68)	.01n.s.
社会的逸脱	悪質軽視	1.53(0.54)	1.42(0.32)	2.20*
	過去経験	1.69(0.62)	1.38(0.36)	5.20**

** $p<.01$, * $p<.05$

Table3 空虚感・認知的歪曲・社会的逸脱の男女別の相関係数

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
空虚感	1 漠然とした不安感	-	.60**	.65**	.54**	.32**	.08	.26**	.27**	.17*
	2 無気力・無目的感	.63**	-	.61**	.52**	.19*	.28**	.21*	.20*	.13
	3 否定的自己感	.65**	.52**	-	.63**	.26**	.16	.16*	.13	.12
	4 孤独感	.54**	.55**	.67**	-	.34**	.16	.32**	.23**	.12
認知的歪曲	5 自己中心性	.39**	.29**	.28**	.28**	-	.44**	.51**	.28**	.28**
	6 責任の外在化	.13	.26**	.24**	.01	.17*	-	.35**	.23**	.27**
	7 虚偽過小評価	.34**	.34**	.41**	.32**	.50**	.33**	-	.32**	.27**
社会的逸脱行為	8 悪質軽視	.20*	.31*	.18*	.25**	.33**	.26**	.33**	-	.52**
	9 過去経験	.23**	.16	.07	.15	.39**	.09	.17*	.35**	-

相関行列の対角成分左下欄は男性, 対角成分右上欄は女性における各相関係数を示す.

** $p<.01$, * $p<.05$

去経験に正の影響を与えていた（男性： $R^2=.12$, $\beta=.35$, $p<.001$ ；女性： $R^2=.27$, $\beta=.52$, $p<.001$ ）。

5. 因果モデルの検討

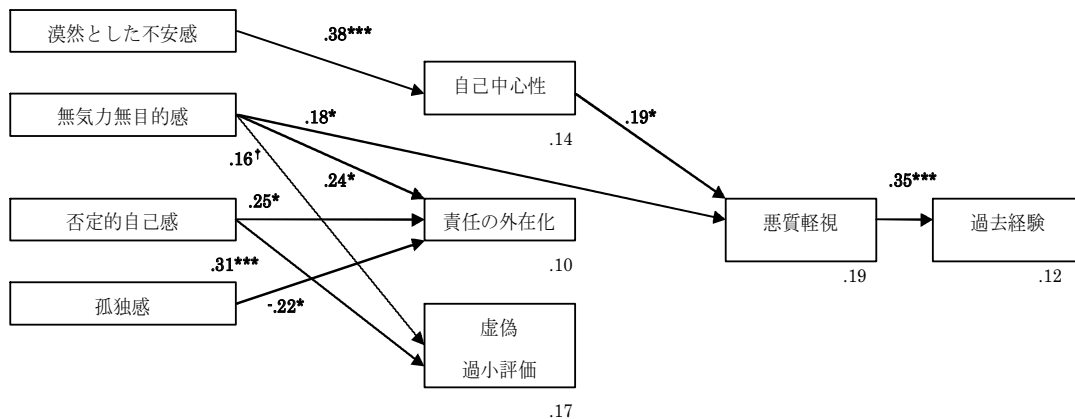
空虚感，認知的歪曲，社会的逸脱行為傾向の関連を検討するため，男女別にパス解析を行った。なお，社会的逸脱行為に対する悪質軽視から過去経験に与える影響が男女ともに検出されたので，分析モデルはFigure1のように空虚感・認知的歪曲は社会的逸脱行為に対する悪質軽視にパスを想定することで社会的逸脱行為へ与える影響と仮定した。

まず，男性のモデル図の分析を行った。モデルの適合度の結果，複数のモデルが適合したため，いくつかの適合度指標を参考とし，Figure2のモデルが最も適合すると判断された（ $\chi^2(16)=25.88$, $p>.56$ ；GFI=.963；AGFI=.895；CFI=.975；RMSEA=.067；N=140）。RMSEAの値が.05を上回っており，AGFIが.90を切っているという問題は残るが，許容範囲であると考えられる。なお，Figure2には有意なパス係数の推定値のみ示している。また表記の煩

雑さを避けるためFigure2には除外されているが，空虚感尺度にはそれぞれ因子間相関があり，認知的歪曲因子の誤差変数間相関が仮定されている。漠然とした不安感と無気力・無目的感の相関は $r=.63$ ，漠然とした不安感と否定的自己感の相関は $r=.65$ ，漠然とした不安感と孤独感の相関は $r=.54$ ，無気力無目的感と否定的自己の相関は $r=.52$ ，無気力無目的感と孤独感の相関は $r=.55$ ，否定的自己感と孤独感の相関は $r=.67$ であった。自己中心性と責任の外在化の誤差変数間の相関は $r=.43$ ，自己中心性と虚偽過小評価の誤差変数間の相関は $r=.14$ ，責任の外在化と虚偽過小評価の誤差変数間の相関は $r=.25$ であった。

適合したモデルから，男性の社会的逸脱行為は，空虚感の漠然とした不安から認知的歪曲の自己中心性に影響し，社会的逸脱行為に対する悪質軽視に至って実際に社会的逸脱行為を行ったことがある過程と，空虚感の無気力無目的が社会的逸脱行為の過去経験に影響し，実際に社会的逸脱行為を行ったことがある過程が考えられる。

次に，女性のモデル図の分析を行った。



注1) *** $p<.001$, * $p<.05$, † $p<.10$, なお，有意なパスのみを图示している。

注2) $\chi^2(16)=25.88, p>.56$; GFI=.963; AGFI=.895; CFI=.975; RMSEA=.067; N=140

注3) 独立変数・誤差変数間の共分散は省略されている。

Figure2：男性の空虚感・認知的歪曲・社会的逸脱行為のパス図

モデルの適合度の結果、複数のモデルが適合したため、いくつかの適合度指標を参考とし、Figure3のモデルが最も適合すると判断された ($\chi^2(20)=26.159, p>.161$; GFI=.963; AGFI=.918; CFI=.985; RMSEA=.046; N=145)。なお、Figure3に示したパス係数の推定値は全て有意だった。また、表記の煩雑さを避けるため Figure3には除外されているが、空虚感尺度にはそれぞれ因子間相関があり、認知的歪曲因子の誤差変数間相関が仮定されている。漠然とした不安感と無気力・無目的感の相関は $r=.60$ 、漠然とした不安感と否定的自己感の相関は $r=.65$ 、漠然とした不安感と孤独感の相関は $r=.54$ 、無気力無目的感と否定的自己感の相関は $r=.61$ 、無気力無目的感と孤独感の相関は $r=.52$ 、否定的自己感と孤独感の相関は $r=.63$ であった。自己中心性と責任の外在化の誤差変数間の相関は $r=.45$ 、自己中心性と虚偽過小評価の誤差変数間の相関は $r=.44$ 、責任の外在化と虚偽過小評価の誤差変数間の相関は $r=.32$ であった。

適合したモデルから、女性の社会的逸脱行為は、空虚感の孤独感が認知的歪曲の虚偽過小評価に影響し、社会的逸脱行為の悪質軽視に至り、実際に社会的逸脱行為を行っ

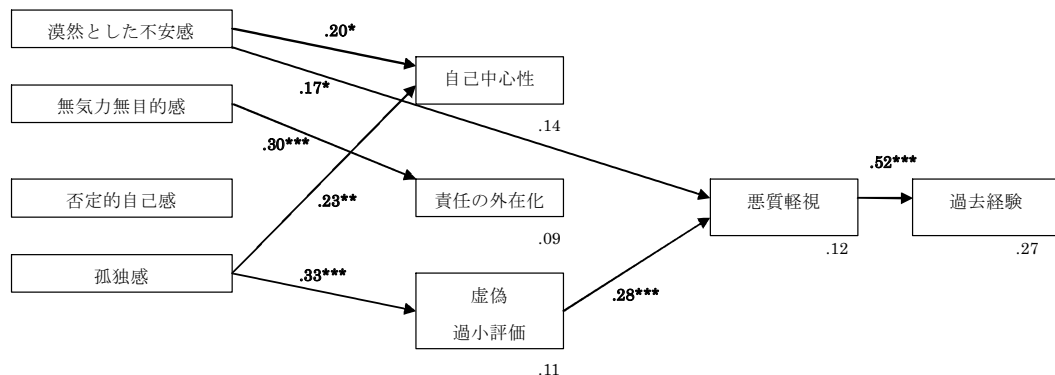
たことがある過程と、空虚感の漠然とした不安感が社会的逸脱行為の悪質軽視に影響し、実際に社会的逸脱行為を行ったことがある過程が考えられる。

【考察】

本研究の目的は、空虚感や認知的歪曲は社会的逸脱行為に対する悪質軽視に影響し、社会的逸脱行為の悪質軽視は過去経験に影響するというモデルを仮定し、検証することであった。パス係数の結果、男女で異なったモデルが検出された。

1. 男性の社会的逸脱行為における過程

空虚感の全因子がそれぞれ認知的歪曲に影響を及ぼし、認知的歪曲の自己中心性が社会的逸脱行為に影響を与えている可能性が示された。すなわち、空虚感を感じているほど自分勝手な認知が高まり社会的逸脱行為を軽視し、実際に社会的逸脱行為を経験したことがあるというモデルであることがわかる。空虚感因子の中でも特に認知的歪曲と社会的逸脱行為に影響を与えていたのが無気力・無目的感であった。この因子は空虚感因子の中で唯一社会的逸脱行為に対する悪質軽視に直接効果を与えていた。佐藤(1994)によると、無気力は「日常生活全般で、自分をやる気がないと感じるこ



注1) *** $p<.001$, ** $p<.01$, $p<.05$, なお、パスは全て有意だった。

注2) $\chi^2(20)=26.159, p>.161$; GFI=.963; AGFI=.918; CFI=.985; RMSEA=.046; N=145

注3) 独立変数・誤差変数間の共分散は省略されている。

Figure3: 女性の空虚感・認知的歪曲・社会的逸脱行為のパス図

と」と定義しており、何に対してもやる気がなく日々退屈に感じているほど、自分がした悪いことを他人のせいにした（責任の外在化）ウソをつくことに対する態度が甘かったり（虚偽過小評価）、社会的逸脱行為に対する悪質性を軽視する傾向があると指摘されている。また、下坂（2001）が行った無気力に関する研究によると、無気力は将来への不安感である「自己不明瞭」、毎日が疲れていると感じる「徒労感」の他、自分を本当に理解してくれる人はいないという「他者不信」で構成されている。このことから、無気力と他者への不信や敵意・他者への認知的歪曲は関連が深く、本研究で「無気力・無目的感」から認知的歪曲や社会的逸脱行為に対する悪質軽視に多くのパスが出ていたように、「無気力・無目的感」は、社会的逸脱行為だけでなく犯罪や非行の大きな原因の一つである可能性がある。

また、注目すべきは孤独感から責任の外在化へのパスが負の値となっていることである。この結果は、男性は孤独感が強いほど、悪いことを人のせいにしないう傾向があるということを示している。落合（1985）によると、孤独感とは「親和志向が強く、しかもそれがうまく果たせない状態の人で、かなり自己の内面に関心を持っている人が感じる感情」としている。このことから、孤独感の高い男性は親和志向が強いゆえに、悪いことを人のせいとせず周りと調和していこうとする傾向があるのかもしれない。

2. 女性の社会的逸脱行為における過程

男性と比較すると有意なパスが少なく簡潔なモデルになったと言える。男性は空虚感のそれぞれの因子から何らかのパスが出ていたが、女性は否定的自己感からの有意なパスは認められず、また認知的歪曲の自

己中心性・責任の外在化から悪質軽視への有意なパスも認められなかった。その代わり、男性の認知的歪曲からの有意なパス係数は比較的低かったが、女性の認知的歪曲からの唯一の有意なパスである虚偽過小評価から社会的逸脱行為に対する悪質軽視への有意なパス係数の値（.28）は、男性の自己中心性から社会的逸脱行為に対する悪質軽視への有意なパス係数（.19）よりも高く、0.1%水準で有意だった。このことから、女性の社会的逸脱行為には認知的歪曲の虚偽過小評価が深く関わっており、ウソをつくことに対して悪いと思っていない傾向が高いほど、社会的逸脱行為に対する悪質性を軽視している傾向があると言える。また、この虚偽過小評価には孤独感からのパスが認められた。男性では孤独感から責任外在化へのパスが引かれ、値が負であったのに対し、女性では虚偽過小評価と自己中心性にパスが引かれ双方とも正の値であった。大野（1985）によると、孤独感の男女差は示されておらず、研究結果が一致していないとされている。同じ孤独感を感じても、男女でその影響の仕方が違う可能性があり、その結果、女性の場合は孤独感が自己中心性と虚偽過小評価に正の影響を与えていたのかもしれない。これらのことをふまえると女性の社会的逸脱行為における過程は、「仲間はずれにされたくなく、周囲となるべく上手くやっていきたい」と思う孤独感が仲間と上手くやっていくためにウソをつくことを悪いことだと思わなくなることで、社会的逸脱行為をしていたものと考えられる。

また、女性では漠然とした不安感が社会的逸脱行為に対する悪質性軽視に直接効果を与えていた。女性は男性よりも漠然とした不安を強く感じていたという結果からも、

女性は「漠然とした根拠のない不安感」を抱くほど、自己中心的な考えによって他者に暴力的になったり、その悪質性を軽視する傾向があるといえる。

3. 総合的考察

本研究では、まず社会的逸脱行為に対する悪質性の軽視が社会的逸脱行為の過去経験に与える影響を検討し、その上で空虚感が社会的逸脱行為に直接効果、または認知的歪曲を媒介した間接効果を与えているかを検討した。

社会的逸脱行為に対する悪質軽視と過去経験の関連について、男女共に社会的逸脱行為に対する悪質性を軽視しているほど社会的逸脱行為を行ったことが明らかになった。双方、十分に有意な係数の値ではあったが説明率が低いという問題点が残った。一方で、女性と男性の相関係数の差を検討したところ、有意傾向であることが示された。このことから、社会的逸脱行為に対する悪質軽視と過去経験は、男性より女性の方が関連していることが示唆された。このことから、女性は概ね「社会的逸脱行為に対して悪質性を軽視した態度をとっている人ほど、社会的逸脱行為を行ったことがある」という説明が可能であるが、逆に男性では「社会的逸脱行為の悪質性は認識しているが、何らかの理由で社会的逸脱行為を行ったことがある」という解釈も可能である。このことから、社会的逸脱行為に関して男女別の認知過程や要因が想定されることが示された。

空虚感と認知的歪曲、社会的逸脱行為のモデルの検討では、男女は別のモデルであったが、空虚感の因子はそれぞれ認知的歪曲を介して社会的逸脱行為に影響を与えていたもの、社会的逸脱行為に直接効果を与えていたものがあつた。また、男女のモデ

ル図には共通点も認められた。まず、空虚感の漠然とした不安感から自己中心性へのパスが出ていた点である。男女共に「根拠のない漠然とした不安感」は自己中心的な考えと行動に影響を及ぼすものと考えられる。しかし、この研究は湯川（2002）の結果と相反する点がある。湯川（2002）の自己存在感の希薄さに関する研究では、自分の過去・現在・未来に対する自己存在感の希薄さは、男女共に身体的攻撃や言語的攻撃といった表出性の攻撃とは無、もしくは負の相関、一方短気や敵意といった不表出性の攻撃とは正の相関を示していた。本研究で扱った認知的歪曲の自己中心性は、自己中心的な考えによって他者を傷つける場合もある、といった表出性の攻撃であると考えられるので、本研究で、漠然とした不安感と自己中心性が正の相関であったり正の影響を与えていたという結果は湯川（2002）の結果と矛盾している。しかし本研究で扱ったのはあくまで認知的な歪曲であり、直接的な攻撃性を測ったものではないという点がこの研究の結果の差につながったのかもしれない。つまり、漠然とした不安感とは攻撃性ではなく自己中心的な考えに影響を与えており、実際に行うかどうかの決断には関連していないということである。このように考えると、男女共に空虚感から認知的歪曲へのパス係数は中程度の値であったのに対し、社会的逸脱行為に対する悪質軽視への直接パスは有意ではあるが値が低かった点も説明可能である。

以上のように、概ね空虚感と認知的歪曲の関係性は示され、モデル図のパス係数も中程度の値であった。しかし本研究の問題点として、モデルの適合度は十分な値を示していたが、従属変数の説明率がどれも十分ではなかったことが挙げられる。この原

因として認知的歪曲という媒介変数に問題があると考えられる。吉澤・吉田（2004）の研究とも共通しているが、尺度の信頼性が低く、また認知的歪曲から社会的逸脱行為への説明率も低い。本研究では認知的歪曲と社会的逸脱行為に対する悪質軽視間の時間的先行性の問題は解消されていると考え、社会的逸脱行為には別の認知的な変数が潜在しているとも考えられる。一方、空虚感と認知的歪曲の相関係数は中程度に認められているので、認知的歪曲尺度の信頼性を改善するか、他の認知的要因を媒介変数とすることでモデルの説明率の改善が期待される。

4. 今後の展望と課題

本研究は一般の大学生を対象にしていたが、堤（1994）や下坂（2001）の研究から、むなしさ感や無気力感は青年期前期から中期にかけて高まり、中期から後期にかけて低下することが明らかになっている。本研究は、青年期後期で空虚感も低下している大学生を対象としていたために、空虚感と認知的歪曲、社会的逸脱行為との関連が少なかったのかもしれない。空虚感が高まる中学生や高校生でも研究を行うことで、新たな示唆が得られる可能性がある。また、本研究は一般大学生を対象としており、実際の非行や犯罪の原因を示唆できたわけではない。実際に非行少年や犯罪経験者を対象に研究を行い、清永（1999）や間庭（2005）が述べるように、本当に「空虚な犯罪」が増加しているのか検討すべきである。

また、本研究では空虚感が社会的逸脱行為に間接的に影響を与えていることが示されたが、今後は空虚感が低ければ社会的逸脱行為や認知的な歪曲に至らないのか、また空虚感を下げることで社会的逸脱行為をはじめとし非行や犯罪を予防していくと

いう点でも検討していきたい。大野（1984）の青年の充実感に関する研究では青年の心情モデルを提唱し、退屈・空虚感は充実感気分と相反する概念であり、他者への不信・時間的展望の拡散、甘え・自信のなさ、孤立で構成されているとしている。社会的逸脱行為に関して本研究のモデルがあてはまるとすると、大野（1984）の研究から他者を信頼したり自立し充実感を持つことで空虚感を低減し、間接的に社会的逸脱行為を減少させることも期待される。また、清永（1999）や間庭（2005）は、近年の衝動的な犯罪の原因として他者や社会とのつながりの希薄さを挙げている。三浦、原岡（2002）の研究でも、人や社会とのつながりを感じているほど空虚感が低いことを明らかにした。これらのことから、教育現場でも勉強だけでなく人や社会とのつながりという側面に留意し、教師が生徒と接することができれば、青年期の学生は空虚感を感じることなく間接的に社会的逸脱行為を防ぐことができる可能性がある。

文部科学省の調べによると、2008年度の児童生徒の暴力行為は5万9618件と過去最多を記録した。このことから、非行・犯罪に関する研究は今後も重要であると考えられる。本研究は若者の社会逸脱行為傾向と空虚感に焦点を当てていたが、一方で社会的逸脱行為や犯罪・非行といった反社会的行動には、空虚感のほかにもストレスや抑うつなど様々な原因が示唆されている。また、大学生だけでなく中高生を視野に入れ、反社会的行動が減少するような研究が必要である。

参考・引用文献

- Dodge, K.A., Bates, J.E., & Pettit, G.S. 1990
Mechanisms in the cycle of violence.
Science, 250, 1678-1683.

- 法務省 平成 19 年度犯罪白書
- 宝月 誠 2004 逸脱とコントロールの社会学 株式会社 有斐閣
- 清永賢二 1999 少年非行の世界 株式会社 有斐閣
- 間庭充幸 2005 凶悪化は幻想か 世界思想社
- 三浦直樹・原岡一馬 2002 中高生における“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係 久留米大学心理学研究第 1, 71-79.
- Pier J. M. Prins and Teun G. van Manen .2005 aggressive and antisocial behavior. ENCYCLOPEDIA OF COGNITIVE BEHAVIOR THERAPY. Part1,14-17.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究,32,2,12-20.
- 小野田博通 2009 大学生薬物事犯の現状 大学と学生,67,40-45.
- 落合良行 1985 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学,33,1,70-75.
- 佐藤有耕 1994 青年期における自己嫌悪感の発達的变化 教育心理学研究,42,253-260.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究,49,305-313.
- 島井哲志・山崎勝之 2002 攻撃性の行動科学—発達・教育編— ナカニシヤ出版
- 堤 雅雄 1994 むなしさ—青年期の実存的空虚感に関する発達的一研究— 社会心理学研究,10,2,95-103.
- 渡邊 晃 2009 サイバー犯罪の現状 大学と学生,67,35-39.
- 吉澤寛之・吉田俊和 2004 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向：知識構造測定法の簡易化と認知的歪曲による媒介過程の検討 社会心理学研究,20,2,106-123.
- 横田早苗 2008 青年用空虚感尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 徳島大学 2008 年度卒業論文
- 湯川進太郎 2002 自己存在感と攻撃性 カウンセリング研究,35,219-228.
- 湯川進太郎 2005 バイオレンス 攻撃と怒りの臨床社会心理学 (株) 北大路書房

(受付日2010年9月30日)

(受理日2010年10月12日)